



日本学士院ニュースレター

明六社だより



(アインシュタイン教授来日の際の記念写真)

大正11年、日本の出版社の招待でアインシュタイン教授は日本を訪れました。日本への航海中、船上でノーベル賞の受賞の知らせを受け、このことは日本へも伝えられ、博士の日本滞在中はアインシュタインブームとなりました。

写真は11月20日の帝国学士院歓迎午餐会後の東京大学理学部附属小石川植物園での集合写真です。アインシュタイン夫妻を中心に穂積陳重院長、岡野敬次郎(当時法相)、長岡半太郎、北里柴三郎会員等、当時の帝国学士院会員が集いました。

トピックス：

- ・学士院賞受賞者から寄稿いただきました。
- ・秋の公開講演会を開催します。
- ・新客員3名を選定しました。
- ・第3回日韓学術フォーラムを開催しました。

目次：

第98回日本学士院賞受賞者寄稿	2	
第48回公開講演会レポート	6	
第49回公開講演会のお知らせ	7	
その他の講演会等のお知らせ	8	
新客員の選定	9	
第3回日韓学術フォーラム	10	
外国アカデミー等との交流	12	
総会における論文報告・談話	13	
論文を募集しています	14	
		(会員寄稿)出版物を通しての日本 学士院 15
		本院所蔵資料の紹介 16
		第1000回を迎えた第2部部会 18
		会館施設の利用案内 19
		寄附のご案内 19
		会員・客員の逝去 20
		ご案内 20
		編集後記 20

第98回日本学士院賞受賞者寄稿

天皇皇后両陛下をお迎えして、日本学士院第98回授賞式を平成20年6月9日(月)に日本学士院会館(東京・上野公園)で挙行了しました。本年は、隔年で授賞する日本学士院エジンバラ公賞の授与も行われました。

－恩賜賞・日本学士院賞－

諸熊 奎治 (京都大学福井謙一記念研究センター・リサーチリーダー)

－日本学士院賞－

保坂 高殿 (千葉大学文学部教授)

大竹 文雄 (大阪大学社会経済研究所所長・教授)

藤吉 好則 (京都大学大学院理学研究科教授)

中井 直正 (筑波大学大学院数理物質科学研究科教授)

長谷川 晃 (ソリトン通信代表)

大山 莞爾 (石川県立大学生物資源工学研究所教授)

寒川 賢治 (国立循環器病センター研究所所長)

永井 美之 ((独)理化学研究所感染症研究ネットワーク支援センター長)

－日本学士院エジンバラ公賞－

和田英太郎 ((独)海洋研究開発機構地球環境フロンティア研究センター生態系変動予測プログラムディレクター)

天皇皇后両陛下は、式に先立ち、受賞者の研究内容を展示室にて御覧になりました。各受賞者は、その永年にわたる研究を簡潔に説明し、両陛下の御質問に答えました。(写真1)

続いて、式では、天皇皇后両陛下の御臨席のもと、久保正彰院長から10人の受賞者に賞状、賞牌が授与されました。(写真2)

本年度も、多くの招待者が訪れ、大変盛大な授賞式となりました。



(写真1) 受賞者の研究を御覧になられる天皇皇后両陛下



(写真2) 院長から賞状、賞牌を授与される受賞者

授賞理由等の詳細は、日本学士院ホームページをご覧ください。

<http://www.japan-acad.go.jp/>

授賞式を終えて…。受賞者からの寄稿

両陛下に格差問題を説明

大竹 文雄

学士院賞の授賞式の前に、各受賞者は天皇皇后両陛下に研究内容を3分で説明し、両陛下からのご質問に答えるという機会があります。言ってみれば、両陛下にポスターセッションでの報告をするというものです。日本の所得格差拡大を、人口の高齢化で説明できることを示したのが私の研究ですと図を使って説明しました。加えて、若者の間での格差が拡大していることとお話しました。

天皇陛下から「高齢化で所得の格差が拡大するのは避けられないのですか」という質問がありました。「日本の高齢者の中の格差は社会保障の充実で縮小してきています。むしろ問題なのは、就職氷河期に生じた若者の間の格差の拡大です」と申し上げると

「若者の就職状況は今でも悪いのですか」という質問を天皇陛下から受けました。「最近では景気がよくなりましたので、若者の就職状況も好転してきましたが就職氷河期に卒業した世代は、非正社員の比率が高いのが大きな問題です」と答えました。

皇后陛下からは「若者の格差問題対策にはどのような政策が必要ですか」というとても難しい質問を受けました。難問ですから「景気を良くすること、年齢に関係なく正社員になれるように社会の仕組みを変えること、職業訓練や教育のような、若者を支援する仕組みを作ることが必要です」と答えることが精一杯でした。両陛下が若者の格差問題にご関心をお持ちになったことがとても印象的でした。



授賞式－感謝の気持ち

藤吉 好則

ポスターとして25枚もの図や写真を準備したので、掲示するのに長い時間が必要ではないかと懼れていましたが、事務局の方々が手際良く助けて下さり短時間で準備ができましたことに、最初から感謝の気持ちでスタートしました。授賞式当日は、陛下へのご説明が始まるまで、学士院会員の先生方とお話しする時間がありましたが、学士院会員の先生が気を配っていただきまして、一人所在無く立ち尽くすことなく、多くの先生方とお話しすることが出来まして、この日も感謝の気持ちでスタートしました。

陛下に3分間でご説明するのは容易なことではなくて、例えば、皇后陛下が「20億というのは何か」とご質問されましたが、それは私の説明の仕方が悪かったためでした。アクアポリン-1という水チャネル1分

子で、1秒間に20億個という水分子を高速に透過することができて、イオンもプロトンさえも透過しないというこの水チャネルの機構が解明できたということをご理解いただけるようにご説明できなかったのです。

授賞式と祝賀パーティーは多くの先生方が参加して下さいましたが、私としてはボーッとしている間に終了しました。その後の宮中でのお茶会は、陛下をはじめ皇室の方々が参加者一人一人と丁寧に話そうとされたのに、敬意と感謝の念を抱きました。文部科学大臣主催の晩餐会は、皆さんと楽しくお話出来たことなど、最後まで感謝の念でいっぱいの一日でした。

皇居での両陛下との会話から

長谷川 晃

今回の受賞に際し、最も思い出となったことは宮中でのお食事会で両陛下と親しくお話しさせていただく機会が与えられたことです。まず皇后陛下から「同い年ですから、小学校に行く機会がなかったですね」と親しくお言葉を頂き、これをきっかけに、日頃日本が誇りとするべきことでありながら、あまり知られていない2つの日本歴史上のエポックの話をして、両陛下に大変興味を持っていただくことができました。

その一つは、日本の江戸時代は世界にその例を見ない、「文明の進歩が兵器の進歩につながらなかった時代であった」ということです。ポルトガルから火縄銃が入ると数年のうちに和製の銃が大量生産され、信長はこれを用いて日本全土を制圧したことはよく知られていることですが、あまり知られてないことは信長一人が持っていた銃の数は当時のヨーロッパ全体の銃の数を上回っていたことです。つまり当時の日本は世界一の軍事大国であったのです。ところが江戸幕府は銃を全面廃止し、一大軍縮を実行しました。現在だとこれは核兵器の全面的撤廃に相当することです。しかし、江戸文化は大いに栄え、なおかつ軍事技術は全く進歩しませんでした。おかげで明治維新では軍事力で世界に追いつくことで苦労しましたが、これは、陛下がおっしゃった通り、当時の日本の識字率が大変高かったからであります。江戸時代の文明の発達に軍事技術の発達を伴わなかったことは我が国が持つ世界に誇るべき歴史であります。

もう一つの誇るべき歴史的事実は、平安時代の日本女性の活躍です。当時の世界を見渡せば日本以外の女性は100%文盲でした。しかし、日本では世界最初の長編小説である源氏物語が女性によって完成されました。そればかりではありません。枕草子で清少納言は「しかるべき家庭の女性は、偽の幸せを願って結婚を夢見ず、宮仕えをし、世の中を見るべきである、こうした働く女性をとにかく言う男性はいとにくし」といっています。つまり、日本は世界に千年も先駆けてウーマンリブが存在したのです。

皇后様はこの話をいたく気に入っておられたご様子でした。



天皇皇后両陛下をお迎えする受賞者

学士院賞受賞雑感

大山 莞爾

天皇皇后陛下のご臨席のもと、学士院賞受賞は大変な栄誉であることを強く感じました。授賞式の日、年はとっていても緊張するものでした。両陛下への展示説明は、随分練習しましたが、年甲斐もなく本番になるとやはり話しの順序がくるうものです。天皇陛下のご下問はある程度予測していましたが、皇后陛下のお尋ねは予想外でありあわてました。ゼニゴケの雄性染色体一本の全遺伝子構成に関する研究内容をご説明申し上げましたが、「残りの染色体は？」と聞かれ、目下、国際コンソーシアムで進行中ですとお答えするのがやっとでした。引き続き、天皇皇后陛下のお前で、賞状、賞牌をとどこおりなく頂くことができました。

宮殿でのお茶会は、皇族の方々がテーブルを順番に移動される形式であり、初めてでありましたがなかなか雰囲気のあるものでした。私たちのテーブルでは、京都御所と皇居のたたずまいの違いが話題になりました。京都の庭園にはコケが繁っているが、皇居には連翠の間から見る限り、コケは見あたらず綺麗にされているのではないかと私見を述べました。

文部科学大臣主催の晩餐会は大変和やかで、それぞれのグループで話しが弾んだようでした。私達のグループでは文部科学省研究振興局長が教育研究振興のため、受賞者は対外的な啓蒙にも活躍を期待する旨、話されました。一日を通じ多くの学術関係の先生や学士院会員の先生にお会いすることができ大変光栄に感じながら、金沢に戻りました。



展示室風景

未知のペプチドへのチャレンジ

寒川 賢治

このたび日本学士院賞を授与されたことは非常に光栄であると同時に、賞の重さを実感しています。今回の受賞は、生体内の新規ペプチドの探索という、非常に地味な一連の研究の積み重ねが評価されたものですが、これは長年にわたり恩師や多くの共同研究者の協力結果であり、彼らを代表して私が頂いたと考えています。



受賞者の研究成果の展示

私のこれまでの研究は、常に新たなペプチドへのチャレンジを続けたということに尽きると言えます。未知のペプチド探索は、始めたからといって成功に至ることの保証は全くない極めてリスクの大きい、また多大な忍耐を必要とする研究です。私の場合は幸運にも多くのペプチドに巡り合うことが出来ましたが、失敗に終わった探索も数多くあります。しかし、探索無くして新たなペプチドの発見に至ることはあり得ません。私は今後も出来る限り新たなペプチドへのチャレンジを続けたいと考えていますが、若い研究者にはサイエンスにおいて未知の物質や現象へのチャレンジの重要性だけは身をもって伝え、私が成功し得なかったペプチドに対して、彼らが今後再チャレンジしてくれることを期待しています。

生体内ペプチドの発見から臨床応用に至る道は容易ではありませんが、グレリンを始めとするこれまでに見出したペプチドが一つでも多く、また一日でも早く治療薬として役立つことを願うものです。

至福の時

永井 美之

授賞式終了後、受賞者と新学士院会員は宮殿にてのお茶会に招かれました。お茶会とはいえ、何皿もの料理とワインを頂きました。ディッシュが変わる毎に、両陛下、皇太子殿下、文仁親王同妃両殿下が順々に出席者の各テーブルを訪れ、とてもうち解けた感じで、お声をかけられ、会話が弾みました。至福の二時間でありました。両陛下は午前の授賞式と午後のお茶会と、6月9日全日を私たちのために割いて下さったことになります。6月12日、いまだお茶会の余韻がさめない私は、両陛下が開園50周年にあたり都立多摩動物公園をご視察との小さな記事を目にして、気がかりになりました。宮内庁ホームページには、最近のご日程が公開されています。案じたとおり、過密に思われました。国民を愛し、国民に愛される両陛下なるがゆえでありましょう。お身体を御大切にと祈るばかりです。

こんな感慨に浸りながら、私はアフリカ、ザンビア国の首都ルサカに発ちました。ザンビア大学獣医学部に北海道大学が設置した「人獣共通感染症共同研究拠点」の開所式に出席するためです。ザンビア大学獣医学部は建設そのものが日本の援助で行われてきましたが、それはプリンス、プリンセス時代の両陛下のザンビア訪問と当時のザンビア大統領ケネス・カウンダ博士との会談(1983年)に端を発することを知りました。カウンダ元大統領はザンビアの国民的英雄です。開所式後の祝賀会に大きな拍手に迎えられて登場、両陛下のザンビア訪問のことを「よく覚えている」とおっしゃっていました。遠きザンビアにて、両陛下の世界平和と国際貢献を希求して止まない若き日々から今日までの一貫したお姿を想い、あらためて深い感銘を受け、あの至福の時間が蘇りました。

学士院エジンバラ公賞受賞の喜び

和田 英太郎

今回日本学士院エジンバラ公賞を受賞し真に光栄に思っております。エジンバラ公賞は、日本学士院名誉会員であるエジンバラ公フィリップ殿下からの申し出により創設され、広く自然保護及び種の保全の基礎となる優れた学術的成果を挙げた者に対して隔年で贈られるものです。この中で、私の研究成果の課題は「流域単位の生態系の多様な構造の解明と環境変動への応答に関する研究」とくに安定同位体フィンガープリント法を駆使したその総合—でした。

研究の中身を概略しますと、DNA解析が進化系統樹を透視する方法であるのに対して、私が確立した安定同位体精密測定法は同位体効果という分子振

動で自然生態系の食物網や物質の流れを透視するものです。

はじめ自分はこの賞に適するか不安でしたが、「自然保護及び種の保全の基礎となる優れた学術的成果」に対応し、今後の自然生態系やその生物多様性研究には不可欠な方法論の提示であると、多くの生態学者やその周辺分野の人から激励され、受賞に自信を持つことができました。特に周辺分野の研究者は賞の対象が広がり、我々にもチャンスの可能性が出てきたと大変喜んでくれた方が多数でした。この点ではみんなのお役に少しはたったかなと思っております。



談笑する受賞者



受賞者記念写真(第98回)



第48回公開講演会レポート

第48回公開講演会を平成20年5月31日(土)、北海道大学学術交流会館にて開催しました。北海道大学の共催、北海道の後援を受けて、当日は多くの方々の参加がありました。北海道大学の佐伯浩総長の挨拶後、「地震」を考える」という共通テーマの講演会が始まりました。

初めに、地球物理学の上田誠也会員が、短期予知の可能性について一貫した論旨で講演を行いました。続いて、経済学の観点から貝塚啓明会員が、地震を含めた災害の損失という側面から多面的な視点で講演を行いました。

短期予知へ。意識イノベーション！！

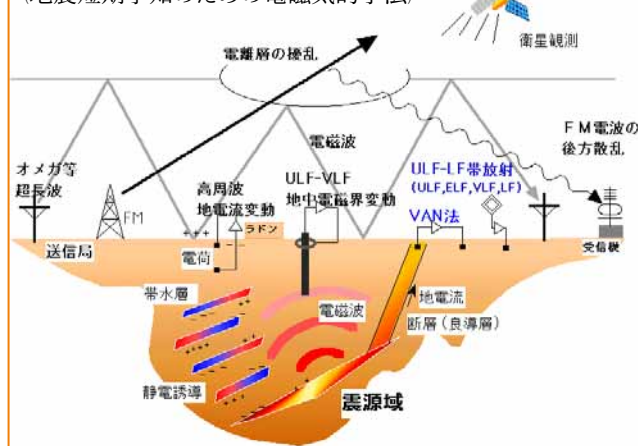
上田 誠也 会員

今回のテーマ「地震」は、5月12日に甚大な被害をもたらした中国・四川地震が発生し、はからずもまことに時宜を得たものとなりました。当初の講演予定者は友田好文会員でしたが、大変残念なことに急逝され、私が「地震予知の現状について」の演題でピンチヒッターをつとめたのでした。

私は東大定年のころに、地震予知こそが現代地球科学に残されたフロンティアだとの信念から、プレートテクトニクス研究から研究方針を転じたのです。地震予知といっても、長・中期予測ではなく、短期予知です。それが科学的にも、人命保護のためにも、最重要だからです。ところが、我が国では地震予知の名目で多大の国費が使われているのに、短期予知のための研究はほとんどサポートされていません。短期予知に必要な前兆現象などとらえられないという悲観論が支配しているのです。どうしてそういう事態になったのか、これからの研究は如何にあるべきかなどを力説したつもりです。次期計画には悲観論に打ち勝つ正論もいくらかは採りあげられるかもしれないことにも触れました。

幸い、横山泉会員の名司会もあり、会場からの質疑や意見が活発におこなわれ、講演者としてはまことに楽しいひとときでした。

(地震短期予知のための電磁気的手法)



積極的に質問する参加者



参加者の質問に答える貝塚会員

災害の経済的損失！

貝塚 啓明 会員

災害は、これに巻き込まれた人々に、金銭では表せない打撃を与えますが、間接的にも仕事・家財などが失われてその生活を困難にします。この講演では、このような災害の持つ損失を明らかにしました。

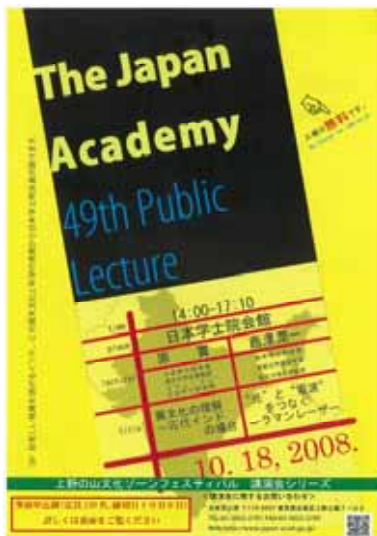
災害と呼ばれる現象は、多種多様で世界的にみれば洪水や暴風が多く、地震は件数からみれば多くはないのです。過去の災害について、ヴォルテールが以下の一節で見事に指摘しています。「地震は、自然の災害であるが、都市という人間行為が高い死亡数の背後にある」

関東大震災や阪神・淡路大震災においても、火事が発生し延焼したことによる人的損失と経済的損失が大きいのです。

第49回公開講演会のお知らせ

平成20年10月18日(土)、第49回公開講演会を日本学士院会館(東京・上野公園)において開催します。

目覚ましい発展を遂げるインド、この国を文化と科学の両方から日本学士院会員が語ります。



異文化の理解 —古代インドの場合—

原 實 会員

西暦紀元前5世紀インドに興った仏教は、約1000年を経て百済から日本に伝えられたが(538AD)、その頃我々の祖先はインドを遠い異国と思っていた。当時彼等にとって全世界は日本を含めて本朝、震旦、天竺の所謂「三国」であったが、その中でもインドは釈迦誕生の理想国と考えられていた。

一方西洋にはアレキサンダー(Alexandros)大帝の東方遠征以来知られてはいたが、本格的に東西交渉が始まったのは1498年ヴァスコ・ダ・ガマ(Vasco da Gama)の所謂インド航路発見以後である。以来宣教師や商人がこの地に来訪するようになったが、1786年英国人ウィリアム ジョーンズ卿(Sir William Jones)がサンスクリット語と西洋古典語との親族関係を発見するに及んで、古代インドは学問研究の対象となった。日本のインド研究も明治以後西洋から導入された。

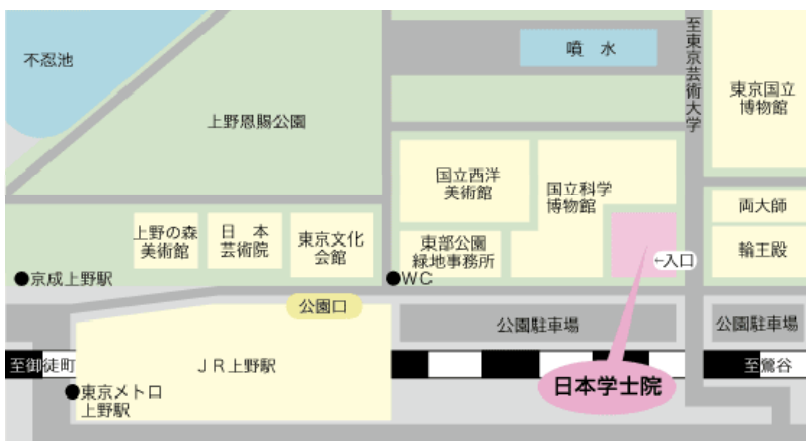
東に仏教研究の長い歴史があり、西に言語学的文献学的研究の伝統のある中で、古代インドの研究と理解はどのような経緯を辿ったのであろうか。

“光”と“電波”をつなぐ — ラマンレーザー —

西澤 潤一 会員

電波は、何も無い空間でも進める電磁エネルギーのかたまりで、1864年にマクスウェルが理論的に発見した極めて珍しい現象である。これを実験的に証明したのがハインリッヒ・ヘルツで1886~88年であった。実際に通信に利用したのは1895年マルコーニで、ほぼ同時期ポップも同じような実験を行った。これを使って、指定した人と通信を行う携帯電話などが出来て利用者毎に電波を配分するとすぐ足りなくなる。今後ますます盛んになる通信にもラマンレーザーで出るテラヘルツ波は正に旱天の慈雨である。更に有機化合物に共振するから、病気の検知から薬理学の研究、ウィルスや菌の分類など極めて広範囲に応用が可能で細菌学についても新しい見識が導入されるものと考えられる。

《会場案内図》



※お車での来場はご遠慮下さい。

お問い合わせ先

日本学士院 公開講演会係
〒110-0007 東京都台東区上野公園7-32
TEL: 03-3822-2101 FAX: 03-3822-2105
E-mail: kouenkai@japan-acad.go.jp
<http://www.japan-acad.go.jp/>

その他の講演会等のお知らせ

日本学士院会館(東京・上野公園)では、公開講演会のほかにも興味深い講演会等が開催されます。詳細については、ホームページ(<http://www.japan-acad.go.jp/>)をご覧ください。

今後、新たに開催が決定した講演会は、随時ホームページでご紹介いたします。

開催年月日	内 容	講 演 者
平成20年10月29日	法・暴力・儀礼ー歴史をどう読むか？	カール・クレッシェル客員
平成20年12月13日	仁科記念講演会	李遠哲客員

日本学士院カール・クレッシェル客員来日記念シンポジウム

法・暴力・儀礼ー歴史をどう読むか？

Recht, Gewalt und Ritual: Perspektiven der Quelleninterpretation

○ Karl Kroeschell

(日本学士院客員、フライブルク大学名誉教授)

暴力か法か？ー中世中期のドイツにおける法理解と紛争解決ー

ー講演概要ー

近年の歴史学研究は、西洋中世の紛争解決に関して、法と裁判の役割を低く見積もり、法とは異なる「ゲームのルール」に従って儀礼などを多用しつつ解決がはかられていたことを強調する傾向にある。これに対して本講演は、中世中期ドイツの3つの具体的ケースを分析することを通じて、中世人がある行為の法的重要性や法的拘束力について明確な観念を有していたことを示し、法が中世世界を構成する独自の要素であったことを明らかにする。皇帝の前で決闘する戦士、森の木の実をめぐって争う領主と農民、失われた自由を再び取り戻そうとつとめる男たち、3つのケースの当事者たちの行動から、中世ドイツの法と裁判の姿が生き生きと浮かび上がる。

○ 石井 紫郎

(日本学術振興会学術システム研究センター相談役、東京大学名誉教授)

「儀礼か法か」又は「儀礼と法」ークレッシェル教授の講演をどう受け止めるかー

ー講演概要ー

クレッシェル教授は、近時の文化人類学的歴史学が、西欧中世における紛争解決において法・裁判の果たした役割はマージナルなものであり、「儀礼」的な行為の応酬を律する“Spielregeln”こそが重要である、と主張するのに対して、紛争解決のための「法的手続」が厳存し、実際にも利用されていたことを、事例に即して示すものである。

これを受けて私の果たすべき役割は、最小限、①同じ法制史という分野の研究者として、この論争をどう受け止めるか、及び、②日本を研究対象とする者として、比較史的観点からどのような問題が伏在するか、の二点について、何がしか討論の素材を提供することであろう。

日時：平成20年10月29日(水) 13:15~16:50(開場12:30)

場所：日本学士院

共催：比較国制史研究会

(聴講無料)



新客員の選定

平成20年5月12日開催の第1019回総会において、日本学士院客員3名を選定しました。



季 羨林教授
Professor Ji Xianlin
北京大学名誉教授
専攻学科目: 言語学

季 羨林氏は、若くしてドイツに学び、戦後帰国して以来今日まで、多方面に亘り中国学界を牽引してきた学者として、その業績は国の内外に広く知られている。その著作は『季 羨林文集』24巻(1998年)の中に収められているが、その中の第3巻「中期インド・アリアン語研究(独文)」と、第11-12巻「トカラ語原典の校閲研究」(英文)は同氏の歴史言語学への貢献を、また、第4巻「大唐西域記訳注」と、第9-10巻「糖史」(印度篇と中国篇)は広く東西交渉史への貢献を如実に物語っている。また、15-24巻は古代インドの法典、叙事詩、説話集、戯曲の梵文原典からの忠実な中国語訳を構成して、ここに絢爛たる古代インド文化は体系的に初めて中国に紹介された。

国外に在っても、1951年以降、中国文化代表団の一員としてドイツ、ソ連、インド、ビルマ、イラク、エジプト、シリア等を訪れて幅広く活躍し、再度に亘る来日の機会(1980年、1986年)に各地で講演して本邦学者とも親交を深め、門下に留学生を受け入れて日本のインド学・仏教学の発展、並びに日中学術交流に貢献した。

マッシモ・リヴィ・バッチ氏は、人口学の分野において世界をリードする学者である。人口学を、単に人の数を数える単純な統計から、人間の持つ資質、そして古い時代から現代そして未来を見据える長期的考察と、特に最近における出生率変動の動向、そして、地理的には世界にまたがる視野を持って観察・分析・総括を行い、多くの著書を刊行してきた。また同氏は、人口学の国際組織である国際人口学連合の事務局長、会長を務め、イタリアの最高アカデミーであるリンチェイ・アカデミー会員にも選ばれている。

イタリアと日本は、急激な出生率低下によって、ほぼ同時に人口減少社会となり、共通する課題を抱えている。同氏は、純学問的な歴史人口学の意見交換・指導のみならず、こういった現実的課題の対処をとともに探るべく数回来日されており、日本に知己も多く、日本で実施された「ユーラシア人口・家族構造比較史プロジェクト」に外部評価委員として参加し、同氏の経験に基づく貴重な研究指導を行った。また、少子・高齢化社会に関し、来日し両国の直面する問題について具体的な対応政策・方法について協議を行った。



マッシモ・リヴィ・バッチ教授
Professor Massimo Livi Bacci
フィレンツェ大学教授
専攻学科目: 人口学



金 泰吉教授
Professor Kim Tae-Kil
ソウル国立大学校名誉教授
(大韓民国学術院前会長)
専攻学科目: 倫理学

金 泰吉氏は、日本における高等教育課程を第三高等学校および東京帝国大学法学部で修了しようとする時に、日本の敗戦と祖国の独立による政治・言語・思想の大転換に直面した。同氏はこの混乱を克服するための思想的足場を倫理学に求め、近代倫理学体系を韓国に導入、確立した。同氏の主著の一つである『倫理学』は、韓国における標準的著作として版を重ねているが、同氏はそこから進んで李朝鮮以来の伝統的価値観を批判的分析の対象とした。このような経歴と研究業績によって同氏は、韓国の思想、人文社会科学に世界的な学術交流の道を開いたのであり、とくに日韓学術交流に対する同氏の貢献は極めて大きい。

第3回日韓学術フォーラム

平成20年9月24日～26日に学士会館(神田)において、日本と韓国との比較文化を共通テーマとし第3回日韓学術フォーラムが開催されました。

21世紀日本における韓国朝鮮学の研究環境

21世紀を迎えて、日本と韓国の学術交流は、過去の蓄積を踏まえて、高潮期というべき段階に到達したように思えます。2002年4月に東京大学において、教養学部アジア科に韓国朝鮮地域文化コース(学部レベル)が開設され、大学院人文社会系研究科に新たに「韓国朝鮮文化専攻」が開設されましたが、これは大学院レベルにおける日本最初の「韓国朝鮮学研究」の組織であります。

このように大学院レベルの「韓国朝鮮学」の講座が東京大学に置かれたことは、日本の学術界が韓国朝鮮学をとりわけ重視していることの表れといえます。この講座開設は、やがて他の有力大学にも波及して、この学問が学術界に大きな比重を占めるに至るだろうことは疑いありません。この講座において育成された人材が、21世紀の日韓両国の学術研究を推進することになると信じております。

すでに多数の若い世代が留学を通して相互理解を深めようとしている今日、旧世代に属するわれわれ日本学士院会員としても、21世紀の学問の将来を見据え、「若い世代のために」という展望をもって、このフォーラムに臨まなければいけない、と思っております。

(第3回日韓学術フォーラム 久保正彰院長基調講演より抜粋)



久保正彰日本学士院長

日本の能の幽玄と韓国タルチュム(仮面舞)のシンミョンプリ :比較研究をどうするか

大韓民国学術院 趙東一会員講演要旨より

私の研究を加え、両国の仮面舞劇の形成過程を比較してみよう。日本の田楽と韓国の農楽は速いスピードで進める農民の遊びという共通点がある。これを母体にして仮面舞劇になった点も同じである。ところで、農民の遊びの進行速度を日本では最大限遅くして能を、韓国ではより速くしてタルチュムを作った。

遅いか速いかとい文明圏の中心部・中間部・周辺部は時代によって変わった。中世の周辺部で近代化を先導し、後進が先進であることを立証した。中世には後進の徴表だった民族語文学が近代になっては民族精神の源と評価され、共同文語文学にこだわるのを後進だと見下げる逆転が起きた。欧州では英国が、東アジアでは日本がその先

頭に立った。近代が歴史の終末ではない。大きな変化を経験してから次の時代に入ると見るのが正しい。中世の評価を近代が覆すようなことが再び起きるはずだ。

韓国と日本の文化特質の比較論が学問的な根拠をきちんと整えるためには、マクロ的な観点で多面的な考察が必要である。両国の間にはしこりが残っているという考え方を捨て、世界文明史の広範な理解に基づく理論的な見方を持つのが望ましい。どの文明圏にも中心部・中間部・周辺部があって基本的な特質が一致するということが分かれば、両国がそれぞれ持つ特殊性が人類文明史の普遍性として認識することができる。



趙東一 会員



日本と韓国の神事芸能の比較—中国を媒介にした一考察

日本学士院 田仲一成会員講演要旨より



田仲一成 会員

本報告では、日本と韓国の神事芸能、特に仮面劇の差がどこからくるかを論じました。

日本の能では、仮面劇の主役は、亡霊であるが、韓国の仮面劇には、亡霊は現れず、登場人物は、主役、脇役ともにすべて俗人で占められています。このことは、両国の間の冥界と俗界に対する考え方の差異に起因すると考えます。

日本では、散楽(猿楽)→田楽→翁(仮面)→亡霊(仮面)という風に、最後は地獄から亡霊が現れる演出に到達し、これが多彩な「能楽」を生み出しますが、韓国では、甘露幀に描かれる地獄や亡霊たちは、次第に悲惨さを弱め、最後は、現世の飲食や舞踏の楽しみを描く風俗画になってしまいます。日本では、散楽の曲芸から、亡霊が出現したことが、その後の能楽につながる鍵になりました。おそらくこのことが、韓国の散楽から仮面が出てくる過程と異なる点であるといえるでしょう。その相違の奥には、両国の基層文化の差があるのではないのでしょうか。



話に聞き入る両国アカデミー会員



守国寺甘露幀1832

例えば、日本では、すべての人が地獄に落ちる恐怖を抱いているのに対し、韓国では、地獄に落ちるのは、跡継ぎを欠いて子孫の祭祀を受けられない孤魂だけの運命とされているのではないのでしょうか。

更に言えば、「現世否定」の仏教思想を受容している日本と、「現世肯定」の儒教思想を受容している韓国との間の基層文化の差というような問題が横たわっているのではないのでしょうか。中国も「現世肯定」の儒教思想に立っていますが、庶民レベルの道教思想では、祖先も地獄におちている可能性があると思われ、これを救出する儀礼が行われていました。この点は、日本と近いものです。日本と中国で悲劇が成立し、韓国で成立しなかった理由は、ここにあるのではないのでしょうか。



『鵜飼』の地獄の鬼

外国アカデミー等との交流

本院では、海外のアカデミー等との交流を活発に行っています。平成20年度の交流事業は、以下のとおりです。



	相手先	会員等氏名	期間
受 入	日本国際賞受賞者	Vinton G. Cerf博士 Robert E. Kahn博士 Victor A. McKusick博士	20.4.22
	日露関係資料をめぐる国際研究集会2008	Vladimir Sobolev博士 Alexander Sokolov博士 Vadim Klimov教授	20.5.20
	スウェーデン王立科学アカデミー	Erling Norrby会員	20.9.4～9.11
	大韓民国学術院(第3回日韓学術フォーラム)	金 商周会長、朴 煥植、 林 熾燮、呉 昶南、趙 東一、 李 成茂、金 炳洙、車 河淳、 鄭 鎮弘(会員) 李 賢珠、南 富榮(事務官)	20.9.24～9.26
	台湾中央研究院(予定)	李 遠哲客員	20.12.11～12.21
派 遣	国際学士院連合総会 第82回総会: ブリュッセル(ベルギー)	原 實会員	20.5.27～6.1
	ラテン語用例辞典編纂事業 国際編集委員会: ミュンヘン(ドイツ)	久保正彰会員	20.7.8～7.15
	ルーマニア・アカデミー	上田誠也会員	20.9.5～9.11
	台湾中央研究院80周年 記念Academy Presidents' Forum	久保正彰会員	20.12.5～12.8



国際賞受賞者と本院会員との懇談



Erling Norrby会員の本院訪問



総会における論文報告・談話

毎月開催される日本学士院総会では、第1部(人文科学部門)は会員が論文を提出、第2部(自然科学部門)では会員の談話とともに学術上優れた外部研究者の論文を中心に紹介が行われています。

以下は、最近提出された会員の論文・談話です。

総会	部	題 目	提出(担当)者
1018回 (4月)	第1部	日本史における「公」と「私」(合同談話会) 二・二六事件における一般兵士 一大衆軍隊の出現の意味―	尾藤正英 三谷太一郎
1019回 (5月)	第1部	ニュートン系科学論とダーウィン系科学論―物質科学・生命科学・ 人文社会科学の連続性と断続性― 日本の医療崩壊と後期高齢者制度	吉田民人 宇澤弘文
	第2部	珪酸塩メルトの性質とマグマの挙動(談話)	久城育夫
1020回 (6月)	第1部	代理母―種々の視角から― サブプライム金融危機を考える ―日本の経験と比較して―	星野英一 伊藤 誠
	第2部	正倉院薬物の科学的調査から漢薬研究への展開 ―薬用人参の 研究―(談話)	柴田承二
1021回 (9月)	第1部	『高僧伝』から『続高僧伝』へ 科学裁判と鑑定	吉川忠夫 中野貞一郎

第1号掲載論文の訂正とお詫び

第1号ニュースレターの論文報告で掲載した武田恒夫会員の「屏風絵と金」よりの抜粋(P. 13)において、誤りが2箇所ありました。ここに、訂正させていただくとともに深謝いたします。

- i 筆推する。(金泥) →(訂正) i 筆描する。(金泥)
- 「踏付ノ屏風」 →(訂正)「磨付ノ屏風」

第1部 武田恒夫会員論文報告「屏風絵と金」より抜粋 <再掲>

金は、その独特の表現効果を発揮することにより、古来、日本絵画の様々な画面に生かされてきた。本日のテーマを屏風絵に限定したのは、中世史料に散見される「金磨付屏風」について、通例の所謂金屏風と区別する必要があるのではないか、という発想によるものである。ただし、東京国立博物館における「室町時代の屏風絵」展(平成元年)図録に掲載された山根有三氏の「室町時代の屏風絵概観」は金磨付屏風に注目を示した最初の論考であるが、その後も実態についてはテーマとならないで今日に至っている。

さて、絵画表現の素材として、金は次のように大別し得る。

- i 筆描する。(金泥)
- ii 塗る。引く。(金泥)
- iii 蒔く。振る。(金砂子、切箔、野毛等)
- iv 貼る。押す。(金箔)

金磨付とはどのような手法を指すのか、これを間接的に示唆する資料から、その特色をさぐってみることにしたい。

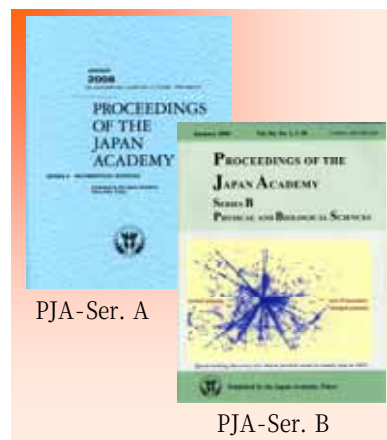
興福寺に伝わる多聞院日記のうち『英俊日記』天正9(1581)年11月25日の条によると、かねてより筒井順慶に懇請していた「磨付ノ屏風」ではなく、「惣金の新調屏風」が到来したという記事が見出される。

論文を募集しています

本院発行の欧文紀要“Proceedings of the Japan Academy”は、明治45年の発行から90年以上の歴史を有し、自然科学の全分野をカバーした欧文誌です。

投稿論文は、学士院会員が中心になり外部研究者を含めた日本を代表する研究者による速やかな審査を経て掲載が決定され、約1ヵ月で出版されると同時にオンライン公開され、世界中からアクセスされています。ノーベル賞やフィールズ賞を受賞した方々をはじめ、若手研究者の方々も投稿され掲載されています。

一般科学者からの論文投稿を広く募集しています。



Proceedings of the Japan Academy の特徴

Series A (数学部門)

- Original Paper (Rapid Communicationを含む) を掲載します。
- 年間10号発行されます。
- 論文は、Project Euclid (<http://projecteuclid.org/pja>) において無償でオンライン公開します。

Series B (数学以外の自然科学分野)

- 日本学士院賞受賞者を始めとする、わが国の優れた研究者の業績をまとめた総説論文を掲載します。
- 将来発展が期待される萌芽的研究の原著論文を掲載します。
- 年間10号発行されます。
- J-STAGE (79巻～最新号、<http://www.jstage.jst.go.jp/browse/pjab>)、Journal@rchive (創刊～78巻、http://www.journalarchive.jst.go.jp/English/top_en.php) において無償でオンライン公開します。

Series A、Series Bともに投稿料・掲載料は無料です。

掲載論文の別刷50部を進呈しています。(別刷超過分は有料です。)

投稿方法等は、本院ホームページをご覧ください。

Series A : <http://www.japan-acad.go.jp/english/PJAA/pjaser.htm>

Series B : <http://www.japan-acad.go.jp/english/PJAB/pjaserb.htm>

編集委員

Series A: 広中平祐 (Ser. A Editor-in-Chief)、森 重文、柏原正樹

Series B: 山川民夫 (Ser. B Editor-in-Chief)、江崎玲於奈、古在由秀、大澤文夫、井口洋夫、樋渡宏一、小柴昌俊、山崎敏光、松野太郎、西澤潤一、本多健一、白川英樹、藤田廣志、野依良治、田中耕一、山田康之、別府輝彦、早石 修、杉村 隆、豊島久真男、井村裕夫、大塚正徳、関谷剛男

Advisory Members: 黒川 清、鈴木邦彦

PJAは1912年に創刊された日本学士院の発行する自然科学の英文学術誌です。米国科学アカデミーが発行しているPNASより2年も早く登場しています。日本の研究者のほとんどが、その成果の情報をPNASも含め国外の有力誌から発信している現状は、他人のフンドシで相撲をとっているようなものです。日本の研究者は、世界中で読んでもらえない学術誌に投稿してもしようがないと言っていないで、日本の学術誌を読まないで遅れをとる状況を作り出すことが大切です。日本での発見は、日本から世界に発信しようではありませんか。皆さんの論文を先ずPJAに投稿していただければ、瞬くうちにこのような状況を作り出せるはず。投稿後迅速公正な査読を経て約1ヶ月で出版され、J-STAGEにおいてオンライン公開されます。2009年度上半期からは、オンライン投稿査読システムの導入でさらなる出版までの効率化をはかります。PJA Ser.Bに関しては、この秋、米国医学図書館が作成するデータベースMEDLINEへの登録が承認されました。皆様の出版された研究成果の情報が、インターネット上で無料提供されているウェブサイトPubMedを介して様々なキーワードでの検索が可能になり、世界のすみずみまで行き渡るようになりました。

奮ってご投稿をお願いいたします。

PJA-Ser. B 編集委員 関谷 剛男

(会員寄稿) 出版物を通しての日本学士院

上野という思い出するのは、西郷隆盛の銅像と動物園であり、桜の季節のお花見、上野駅である。また、上野の学校といえば、東京芸大が出来るまでは、音楽学校と美術学校であった。

日本学士院の名前が私の頭に入ってきたのは、東京天文台に就職してからで、当時の東京天文台長であった萩原雄祐先生が学士院会員で、眼にとまった論文があると、日本学士院の欧文紀要に出版するよう勧められた。私も昭和30年(1955年)に論文の一つを、学士院欧文紀要に載せていただいた。私にとっては、他分野の著名な先生方と同じ雑誌に論文を載せることが出来て、とても嬉しかったことを憶えている。

この欧文紀要については前頁に紹介記事があり、今では会員を通さずに、直接に日本学士院に投稿できる。受理され、会員によって例会で紹介されると、一ヶ月で出版されるという、速報の出版物である。ただし、これは自然科学系の論文に限られている。

日本学士院の出版物で私が興味深く読んだのは、昭和35年(1960年)に出版された「明治前日本天文学史」である。これは昭和16年(1941年)から100名の研究者を動員して行われた、日本学士院の自然科学史の編集・出版事業の一つで、明治前日本数学史*、明治前日本医学史はそれぞれ全5巻で、昭和29年(1954年)から10年ほどの間に刊行されている。この他、明治前日本科学史総説・年表をはじめ、15ほどの分野の明治前の科学技術の歴史が、昭和48年(1973年)までに出版されている。

明治前日本天文学史は500頁をこえる大作で、4編から成り立っている。第一編は、日本に大きな影響を与えた中国の天文学についてであり、第二編は明治前の日本に影響を及ぼした西洋天文学についてである。西洋天文学は、渡来した西洋人により、また江戸時代にオランダ船で運ばれた書物で、また間接的に中国の書物によっても伝えられた。

第三編では、上古から、明治での太陽暦採用に至るまでの、日本の暦と時刻の制度について述べられている。日本には554年、百済の暦博士が中国の暦をもたらし、その後中国で改暦が行われると日本もそれを採用してきた。しかし、861年に採用された暦は、その後800年間もそのまま日本で使われてきた。その改暦を初めて独自に行ったのが、渋川春海(1639-1715年)で、春海はその功績により、徳川幕府から1684年に初めての天文方に任命された。

そして、天文台が作られ、その中に蛮書(西洋の本)翻訳掛が出来、それが独立して蛮書調所となり、それが開成学校となって、明治になって東京大学の一つとなった。

幕府の天文台は、神田、牛込と場所を変えたが、最後の浅草鳥越の天文台は有名で、葛飾北斎の「富嶽百景」の「浅草鳥越の図」に出ている。

第四編では、天文観測の歴史が取り上げられている。日本には天文現象の記述が古い本に残っている。その中で、世界的に有名なのは、1054年のおうし座の超新星の出現で、藤原定家の明月記に「昼間でも見える客星が現れた」とある。現在、かに星雲と呼ばれる天体の起源で、中国や朝鮮にも記録はあるが、西洋にはないのである。この他、日月食、彗星、太陽黒点観測などの記録も、豊富に取り上げられている。

明治になって西欧の科学技術が入ってきて、日本の近代化がなされたというのが定説である。しかし、この本を読むと、江戸時代の渋川春海や地図の伊能忠敬(1745-1818)の業績は、世界的にみても優れたもので、それが明治に受け継がれたのだと思う。

第一回の帝国学士院恩賜賞を受けた、木村栄(1870-1943)の緯度観測での業績も、その流れの上にあると私は考える。それ以来毎年行われてきた日本学士院賞の授賞式は、再来年(2010年)には100回目を迎える。

古 在 由 秀



古在由秀 会員
(第2部部長、第2部第4分科)

昭和3年、東京都生まれ

東京大学理学部天文学科卒業。東京大学東京天文台助手、助教授。昭和54年恩賜賞・日本学士院賞を受賞。昭和56年東京大学東京天文台長。昭和63年国立天文台長。平成9年より群馬県立ぐんま天文台長。平成12年勲二等瑞宝章受章。

昭和55年12月から日本学士院会員

*:文中の「明治前日本数学史 全5巻」は平成20年11月、岩波書店より復刊される予定です。

本院所蔵資料の紹介

伊能忠敬(1745年-1818年)は、実際に日本を歩いて測量し、精度の高い日本地図を完成させました。今回は、本院に所蔵される伊能忠敬関係の資料をはじめ、伊能忠敬の師である江戸の天文学者、高橋至時(1764年-1804年)、その息子で、伊能忠敬とともに全国測量事業をサポートし、忠敬の没後、彼の実測をもとに日本地図を完成させた高橋景保の資料を紹介します。

このコーナーでは、本院が所蔵する貴重図書・資料についてシリーズで紹介します。

今回は「伊能忠敬関係資料」を取り上げます。

伊能忠敬事績事業の始まり…

本院の伊能忠敬の事績調査事業は、明治41年(1908)長岡半太郎会員が、第21回総会において提議したことによって端を発します。

江戸時代、寛政～文化にかけて日本沿海測量に当たった伊能忠敬の功績は歴史的に有名ですが、死後百年余りを経た当時、断片的に資料が残っているだけでした。これらの資料が今後、不明になっていくことを危惧して、この機会に資料の収集を行おうという趣旨の

もと、本院の事業は始まりました。

本院では、長岡半太郎会員が担当委員となり、大谷亮吉氏に委嘱して、この調査に当たらせました。大谷氏は伊能家などに残る測量日誌等の資料、道具、機器等も細部まで調査し、大正6年(1917)に『伊能忠敬』(長岡半太郎監修、大谷亮吉編著、帝国学士院蔵版)を発行しています。この際、収集した資料が、今回紹介する伊能忠敬関係資料となっています。

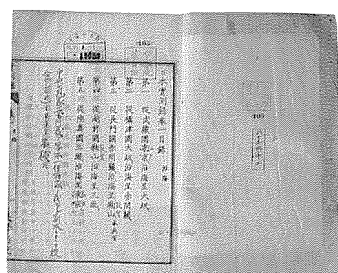
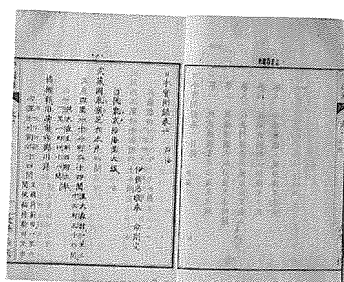
《所蔵資料》

- ー伊能忠敬関係ー 29点(123冊、地図11枚)
- ー高橋至時、高橋景保関係ー 24点(36冊)

大日本沿海実測録

首巻、第1巻～第13巻 木版

文政4年版の大、中、小図とともに幕府に提出された大日本沿海実測録14冊の木版本。沿海、街道の里程、島々、湖沼などについての実測値が記されている。



江戸時代に西洋から天文学と測量技術が入ると、地図が大きく発展しました。

伊能忠敬(1745～1818)は、50歳になってから天文学と測量学を学び、56歳の時に奥州街道から蝦夷地(北海道)南部の測量を行いました。緯度経度を天体測量し、地図の上に基準となる位置を書きこみ、更に実測によって距離を測り記録しました。その後、幕府の要請を受け、20年近い歳月をかけて日本全国の海岸を歩き、非常に精密な

→中図 (大日本沿海輿地図)

畿内 (240×157cm)

東京帝国大学所蔵副本 (大正12年焼失) を写したもの。内容は、1. 北海道東部 (171×157cm) 2. 北海道西部 (232 × 157cm) 3. 東北 (228 × 158cm) 4. 関東 (226×156cm) 5. 畿内 (240×157cm) 6. 四国 (216×157cm) 7. 九州北部 (169×156cm) 8. 九州南部 (157×157cm) の8枚で構成されている。

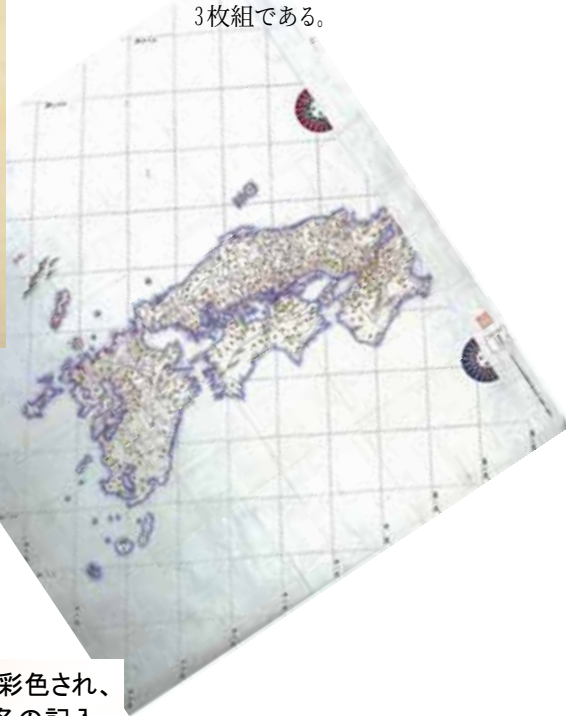


↓日本輿地全圖 特別小図異図

西日本 (カナ書き特別小図)

(縦132×横114)

大谷亮吉氏が『伊能忠敬』を著述した際に収集した資料群の中にある国立国会図書館古典籍室蔵のカナ書き特別小図の模写本である。北海道 (132.5×114)、東日本 (132×114) の3枚組である。



日本地図を作成しました。測量日数は3736日、歩いた距離は約4万キロ近くにも達しました。

未完のまま伊能忠敬はこの世を去りますが、その後は高橋景安がこれを引き継ぎ、文政4(1821)年に「大日本沿岸輿地図」と「大日本実測録」が完成しました。

この地図は、3万分の1(大図)、21万6000分の1(中図)、43万200分の1(小図)の3サイズあり、大きい縮尺のものは214枚、中で8枚、小で3枚に描かれ

ています。すべてが手描きで彩色され、克明な海岸線、街角や町村名の記入、遠方の山頂や島などに至っては方位線が記入されている正確なものでした。

これらの地図は、江戸の末期に作られたものでしたが、明治以降になっても日本地図の作成にたびたび利用され、最後の版は昭和4(1929)年まで陸軍などで測量に利用されていました。「伊能図」は江戸・明治・大正・昭和と時代を超えて活用されました。

第1000回を迎えた第2部部会

平成20年9月12日の例会において、第2部部会が1000回目を迎えました。

日本学士院第2部部会(自然科学部門)は、1906年7月8日に第1回が開催されて以来、今年の9月で1000回を迎えました。その間100年を超えて、第1部(人文科学部門)と共にわが国の学界の進歩、発展に大きく貢献してきたことは慶賀に堪えません。

第2部では、この1000回の間に、恩賜賞92件、学士院賞441件を選びました。また、311名の方を会員として選定してきました。第2部の授賞や新会員の選定は、研究分野の細目化に伴い審査・選考が年々難しくなっているところ、会員の方々の経験と見識に基づいて、授賞や新会員としてふさわしい研究成果や人材を正しく評価できたことは誠に感慨に堪えません。平均年齢80歳と高齢にもかかわらず、毎月の部会では活潑な議論がなされ、審議に充

分な時間が費やされることは感嘆のかぎりです。私もその一員であることに大きな感動を覚えます。

科学の進歩につれて、人文科学と自然科学の緊密な交流、協力が重視されてきました。人類が直面する多くの難問題の解決には、両者の相互理解・協力が益々必要になります。世界最古の自然科学者のアカデミー、レオポルディーナも本年8月、1652年創立以来の伝統を破って人文科学部門を併設しドイツを代表するアカデミーとなりました。日本学士院でも、これまで以上に両部門間での交流・協調を密接に進めることで、今後の日本の学術の益々の発展に寄与していきたいと祈念しています。

早石 修 会員(第2部第7分科)



早石 修 会員
(第2部第7分科)

大正9年、アメリカ合衆国カリフォルニア州生まれ

大阪大学医学部卒業。大阪大学医学部助手。ワシントン大学医学部微生物学教室助教授、米国国立健康研究所(NIH)毒物学部長を経て、京都大学医学部化学教室教授。昭和42年日本学士院賞を受賞。昭和54年京都大学医学部長。昭和58年大阪医科大学学長。平成16年より(財)大阪バイオサイエンス研究所理事長。昭和47年文化勲章。平成5年勲一等瑞宝章受章。

昭和49年12月から日本学士院会員



第1000回部会を迎えて学士院ロビーの階段で記念撮影をする第2部会員：前列左より沢田敏男会員、織田敏次会員、早石 修会員、杉村 隆幹事、長倉三郎前院長、古在由秀第2部部長、林忠四郎会員、豊島久真男会員。(計58名)



会館施設の利用案内



日本学士院会館正面



ロビー

建築家谷口吉郎氏の設計による現在の日本学士院会館は、日本を代表する碩学の府にふさわしい荘厳かつ気品と機能性を備えた建物となっています。館内には、議場のほか大小六つの会議室等があります。

本施設をご利用になりたい方は、日本学士院庶務係までご連絡ください。



(2階平面図)



平成20年度における会館利用状況

利 用 年 月 日	利 用 目 的 ・ 内 容
平成20年5月20日	日露関係資料をめぐる国際研究集会2008
平成20年9月8日	「宗教とテューダー朝演劇の成立」研究会
平成20年10月10日	日独大辞典をめぐるワークショップ
平成20年10月25日(予定)	文献学研究会第9回研究集会
平成20年11月14日(予定)	第8回山崎貞一賞贈呈式

寄附のご案内

民間企業、団体、個人等から広く寄附金を受け入れ、学術の振興に資する事業を実施しています。金額の多少にかかわらず趣旨に賛同される方々からの申し出を期待しています。

なお、本院への寄附金は国に対する寄附金として、寄附者が個人の場合

は、所得より「寄附金控除」の適用を受け、法人の場合は、「寄附金損金算入」の特例が適用されます(関係法令:所得税法第37条第3項第1号)。

詳細については、日本学士院会計係までお問い合わせください。

《平成20年度受入実績》

受入年月	個人・団体名	金 額
平成20年5月	畑 輝雄氏	55,000円
平成20年6月	財団法人原田積善会	500,000円
平成20年6月	財団法人材料科学技術振興財団(MST)	3,000,000円

会員・客員の逝去

Henri Cartan 客員(フランス、数学専攻) 平成20年8月13日 享年104歳

ご案内

(株)ベネッセ・コーポレーション発行の『VIEW21』に本院有志会員が経験を踏まえた「学問の面白さ」を伝える「10代のための「学び」考」というコーナーがあり、学生時代(中学校、高校時代)の思い出、研究者を志したきっかけ、研究の面白さ、中学生・高校生へのメッセージなどが掲載されています。右は、これまで掲載された会員です。是非ご覧ください。

<http://benesse.jp/berd/center/open/kou/index.shtml>

掲載号	会員名
2007年4月号	白川英樹会員
2007年6月号	中根千枝会員
2007年9月号	広中平祐会員
2007年10月号	杉村 隆会員
2007年12月号	西澤潤一会員
2008年2月号	久保正彰会員
2008年4月号	山田康之会員
2008年6月号	星野英一会員
2008年9月号	大村 智会員

編集後記

第2号をお届けする。4月に第1号を発行して早いもので半年が過ぎた。この半年の間に、本院では北海道での公開講演会、第98回授賞式、日韓学術フォーラムなどが開催され、また、9月には第2部部会が1000回を迎えた。それらの様子は記事を参照願いたい。本文の寄稿は全てボランティアでお願いしている。今回は特に第98回日本学士院賞受賞者の方々にお願いし、授賞式前後の様子をお寄せいただいた。ご多忙にもかかわらず寄稿いただいたことに感謝申し上げる次第である。

さて、北京オリンピックが終了し1ヵ月が過ぎた。初めて北京を訪れたのは20年ほど前であったか。その頃の中国はまさしく「赤い国」であった。何と書かれているのかは定かでないが、街のいたる所にスローガンが大きな赤い垂れ幕に書かれて下げられていた。また、

実用自転車の多さ、人民服、さらに街行く人々のどこか無愛想な様子を記憶している。その北京でのオリンピック。開会式のCG、ロパクなど取りざたされていたが、いいではないか。オリンピックはショーを楽しむのではなく、競う場である。いろいろな種目における結果がどうであれ、持てる力を尽くす姿に感動を覚えない者がいるだろうか。まずは成功裏に終わったオリンピック。今後の中国の発展に期待する。中国抜きにしてのわが国、また、世界の発展は望めない。一衣帯水の隣国として良好な関係を発展させていきたいものだ。

第3号は来年4月を予定している。新会員・学士院賞等の選考も着々と進んでおり報告したい。また、「この会員の寄稿を」ということがあれば事務までご要望をお寄せいただきたい。

(H)

日本学士院シンボルマークの由来

「古事記」にも記されている「長鳴鳥(ながなきどり)」は、日本の黎明を告げる鳥という由来があります。鳥は花や草木と一対で描くと、平和で豊かな世界を願う心が映し出されるということで、桜花と対にし、本院のシンボルマークとしました。



日本学士院

〒110-0007

東京都台東区上野公園7-32

電話:(03)3822-2101

FAX:(03)3822-2105

E-mail:

shomu@japan-acad.go.jp

ホームページもご覧下さい。

<http://www.japan-acad.go.jp/>